

2022年の主要大学世界史B入試・論述の概括

『詳説世界史』編集協力者 今泉 博

目次

1. 概 括

2. 2022年の主な国公立大学の論述テーマ一覧

3. 東日本地域の主な国公立大学の論述問題と解答例

筑波大学 7/東京大学 8/一橋大学 9/東京外国語大学 10/信州大学(教育) 11

4. 西日本地域の主な国公立大学の論述問題と解答例

名古屋大学 12/京都大学 13/大阪大学 14/九州大学 15

5. 東京地域の主要私立大学の概括

早稲田大学 16/慶應義塾大学 17/上智大学 18/津田塾大学 18/学習院大学
19/青山学院大学 19/中央大学 19/法政大学 20/明治大学 20/立教大学 20

6. 関西地域の主要私立大学

同志社大学 20/立命館大学 21/関西大学 21/関西学院大学 21

1. 概 括

現行課程入試の7年目となる2022年の概括として、以下の5点を指摘する。

- ① 2022年入試の関心の中心は、やはり「**第2回大学入学共通テスト**」であった。ここでは、ほとんどの生徒が受験した1月15日実施の本試験を対象として述べる。最終的な世界史Bの平均は**65.83点(昨年比+2.34)**であった。「大学入学共通テスト」についての分析は、「大学入学共通テスト 世界史B(2022年本試) 分析と解説」をお渡ししていると思われるので、重複を避ける。基本的には、昨年の「大学入学共通テスト」を継続した出題構成・出題形式・解答形式であった(注:1月29日実施の「追試」では解答形式において、2回の試行テストで出題された2つの連続した解答番号による、複数の正答選択問〈選択解答は1つでよい〉と次問での関連した正答選択の方式が出題された)。2022年は、本試験が出題形式・解答形式などの点で従来のセンター試験に少し戻った傾向が多くみられ、**追試の方が「思考力を問う」共通テストの方向性を追求しているとの、印象を強く受けた。**

生徒には、「大学入学共通テスト」では、**書かれている文章のすべてを丁寧に正しく読み取ることが原則**であり、そのうえで設問文の主旨・意図を正しく理解して正答を導き出すよう、指導してほしい。正答を導き出す基礎は、ふだんの学習で理解・習得した知識・情報の活用である。なお、連続した番号による解答形式への対応も行ってほしい。

- ② 昨年指摘した**受験科目から世界史を外した首都圏の私立大学・学部**の入試は、当然継続されました。世界史教育関係の視点からは、**高校での世界史選択者の減少にもつながりか**

ねないので、こうした動きの今後に注意したい。なお昨年ここで取り上げた、青山学院大学(文一史)での本格論述出題(350字)は今年も継続された。

2022年は、私立大学においてもこれまで以上に**長大な資料文を問題文に使用する大学**が出てきました。論述問題の上智大学はこれまでと同様であるが、**東京女子大学と中央大学(経済)**が長大な資料文を用いた作問を行った。「大学入学共通テスト」を意識して対話文も用いているが、「**思考力を問う**」出題としては**試行中の段階**と言えよう。「大学入学共通テスト」を意識し出題形式が増えるのかどうか、やはり今後の動きに注意したい。

- ③ 2022年も多くの大学で、問題文やリード文において史資料・出典からの引用、地図、グラフ、図版などを利用している。ただし、引用文を「読み取ったうえでの論述」では、ヒントとなる内容や用語が含まれているため、引用文を丁寧かつ正しく読むことが大切であり、「読み取り」と「論述としての再構築」にかなりの時間が必要となる。論述問題に限定すると、**史資料を読み取ったうえでの「思考力を問う」設問を行っている大学は、国公立大では大阪大学と東京外国語大学だけ**と言える。ただし、「読み取ったうえでの論述」では、「読み取り」と「論文の構成」時間を配慮して、一問ごとの制限字数が減ってきている。ちなみに、大阪大学は長くて150字程度が数問、東京外国語大学は500→400字に減少した。**私立大では上智大学と慶応大学(経済)が該当する**。後者の論述は小論述に分類されるが、資料やグラフ・データの読み取りによる出題が多いので、ここに取り上げる。

なお300字程度以上の本格論述は、指定用語がある場合でも「構成力が問われる」ため、広い意味で「思考力が問われる」問題と言えよう。また、ある地域圏でのテーマによる時系列での変化、移民・移動にともなう生じた社会や文化の変化、交易や貿易による地域間のつながりとそれによる影響など、**グローバルな視点からの理解力・把握力**を問う出題が多くなっている。ただ、昨年も指摘したように、どうしても諸大学で出題されるテーマや地域・時代が類似する傾向になっているので、大学側出題者には、新しい視点からの作問開拓を期待する。

なお、教科書の[各部のまとめ]や[各部の主題学習]は、歴史の捉え方・見方や把握の仕方などの点で、論述対策としても有効である。

- ④ 世界史入試の特色の1つとして、「**世界的な動きを反映したテーマ**」の出題を指摘することができる。想定されたとおり2022年は、「**疫病や伝染病**」や「**パンデミックの社会的影響**」を含むものが、早稲田大学(社会科学)・中央大学(文)のほか多くの大学・学部の問題文や設問で見られた。「**奴隷制や人種差別問題**」は頻出テーマの1つであったが、「**BLM運動を反映した人種差別問題**」として、今年も慶応大学(商)が「BLM」をアルファベットで解答させている。さらに、「**権利や社会との関連**」に加えて「**文化面**」などからも、「**女性**」との関連を問う出題が出てきた点に注目したい。

毎回繰り返しているが、『**世界史用語集**』の解説文を利用した**説明文の正誤判定による4択の出題**が多くの大学で続いている。背景として、大学側の作問者が『世界史用語集』

の解説文を教科書・副教材と同列の学習教材と考えていることが考えられる。この形式の出題は往々にして《やや難》レベルになることがあるので、注意してほしい。

- ⑤ **2022年の入試問題でも、作問ミスおよびそれに類する文章表現が数多くみられた。**1つ目は、**文章表現の不注意により4択や5択の説明文の中に複数の該当文が存在するミス**。2つ目は、**選択用語の中に該当する用語が複数存在するミス**である。前者は、作問者の思い込みによる教科書や用語集の文章表現の活用ミス、意味が曖昧に解釈できる文章表現などに起因している。作問者が過去にインプットした知識・情報に基づく表記・表現ではなく、専門分野での現段階での研究状況を反映した教科書の記述内容の変化を踏まえて問題を作成し、かつ文章表記も行ってほしいと考える。後者については、作問者が山川『各国史』や関連研究書で、「教科書や用語集の引用内容だけで十分であるか」をチェックすれば、防げるものである。こうした作業をしたうえ、最も基本的な「**作成した問題文、設問文、選択説明文・用語、および作成した解答例を、出題者を含む複数の目で必ずチェックする体制の確立**」を、大学当局に強く望む次第である。改善の跡が認められない出題状況が続いていることを、毎年もどかしく感じている。

高校の先生方も、使用教科書の改訂ごとの記述内容や用語表記の変更を必ず確認し、その意図を理解して授業に臨んで欲しい。変更点は、『世界史用語集』毎回の改訂にも反映されている。こうした点を踏まえて授業や入試対策指導を行ってほしいと考える。

2. 2022年の主な国公立大学の論述テーマ一覧

2022年世界史入試のうち、主な国公立大学の論述問題から**200字程度以上の論述**のテーマ・形式を以下に紹介する(後述する幾つかの解答例に関しては、必要に応じて設問内容・指定用語に該当する『詳説世界史』のページのみを表記する)。

国公立大学・私立大学を問わず、**事項解説や小論述はもちろん、200字程度以上の本格論述においても、論述内容の最良の手本は教科書の文章**である。設問主旨を正しく理解したうえで受験生が書く(書ける)論述は、教科書の関連箇所を想起し、設問主旨に合わせて文章を再構成できればよい。**受験論述では、『世界史用語集』の解説文のような少し詳細な内容や専門書的内容を書こうと考える必要はない**。時間的制限を受けている受験生は、何度もの推敲や書き直しをできないからである。これが論述問題に関する私の基本的考えで、後述する諸大学の解答例は上記の考えに立って、『詳説世界史』に基づいて作成している。

なお、出典からの引用、地図、図版、史料・グラフなどを利用して作問する《新傾向》の多くは、さまざまな**思考力**が問われる設問となっているものが多い。

★**思考力**を付けた問題の選考基準

- ①国公立・私立大を合わせると、100字程度～600字程度の多くの論述問題がある。ただし、学習による5W1Hの知識力だけで比較的容易に書ける論述問題は、字数の多い少ないにかかわらず除外した。

②思考力問題は、知識の整理力、歴史の関連性や因果関係の理解力、資料・グラフの読み取り力、歴史像の構成力などが必要と考えられる点を目安としている。

.....

〔筑波大学〕

- 大問1 「ヘレニズム時代におけるエジプトとその周辺の歴史」(400字) **思考力**
〈指定用語：アントニウス、カルタゴ、属州、ディアドコイ、ムセイオン〉
- 大問2 「17世紀～第二次世界大戦勃発前までオランダの東南アジア進出」(400字)
《やや難》〈後述〉 **思考力**
〈指定用語：インドネシア国民党、オランダ東インド会社、強制栽培制度、ポルトガル、マレー半島〉
- 大問3 「1910年代～30年代の中国共産党」(400字)《頻出》
〈指定用語：延安、上海クーデタ、帝国主義的特権の放棄、八・一宣言、李大釗〉
- 大問4 「1920年代のアメリカ社会」(400字)《頻出》
〈指定用語：移民法、クー＝クラックス＝クラン、孤立主義、債権国、フォード〉

〔東京大学〕

- 大問1 「8世紀～19世紀のトルキスタン」(600字)《やや難》〈後述〉 **思考力**
〈指定用語：アンカラの戦い、カラハン朝、乾隆帝、宋、トルコ＝イスラーム文化、バーブル、ブハラ・ヒヴァ両ハン国、ホラズム朝〉
- 大問2 テーマ「**支配・統治と法・制度**」
〈問(1)～問(3)で60字小論述が3題、120字小論述が2題〉

〔一橋大学〕

- 大問1 「皇帝フリードリヒ1世のイタリア政策と文化的・政治的状況」(400字)《難》
〈後述〉 **思考力**
〈資料. 勝田友恒「最古の大学特許状」『一橋論叢』よりの引用文〉
〈指定用語：ボローニャ大学、自治都市〉
- 大問2 「ニューディール政策と新自由主義的改革」(400字)《やや難》 **思考力**
〈資料. 「バイデン大統領の議会演説」『日本経済新聞』2021年5月5日の引用文〉
- 大問3 「16世紀～20世紀の朝鮮関係史」(問1～問3で400字)
問1. 「1979～80年の韓国の政治動向」
問2. 「1592～1598年の戦乱の展開過程と明に与えた影響」
問3. 「1880年代～1894年の朝鮮・清・日本の関係」

〔東京外国語大学〕

大問1 問9 「第一次世界大戦後の国際秩序がもった可能性と限界」(400字)〈後述〉

思考力

- 〈資料A.「十四カ条の抜粋」『世界史史料⑩ 20世紀の世界Ⅰ』の引用文
資料B.『ホー・チミン語録』河出書房新社からの引用文
資料C.「国際連盟規約」『世界史史料⑩ 20世紀の世界Ⅰ』からの引用文
資料D.「中華民国全権代表団のヴェルサイユ講和条約調印拒否の電文」
『世界史史料⑩ 20世紀の世界Ⅰ』からの引用文
資料E.「ヤップ島と赤道以北の太平洋委任統治島に関する日米条約」
アジア歴史資料センターHPからの引用文
資料F.「パリ不戦条約」『世界史史料⑩ 20世紀の世界Ⅰ』からの引用文〉
〈指定用語：植民地の戦争協力、二十一カ条の要求、パリ講和会議、経済制裁、戦争の違法化、ドイツ領南洋諸島〉

〔信州大学(教育)〕

大問1 「近世ヨーロッパの政治思想と政治体制」

- 〈資料ア. グロティウス『戦争と平和の法・第三』からの引用文
資料イ. ロック『統治二論』
資料ウ. ボッシュエ『聖書の言葉にもとづく政治論』
『世界史史料⑤ ヨーロッパ世界の成立と膨張』からの引用文〉

(2) 「近世ヨーロッパの政治状況と国際関係」(350字)《頻出》思考力

〈指定用語：ウェストファリア条約、主権国家体制、絶対王政、名誉革命、ルイ14世〉

(3) 「朝貢体制と近世ヨーロッパの国際関係の比較」(150字)

〔名古屋大学〕

大問4 「5世紀までの東南アジアにおける東西交流と海上交易」(350字)〈後述〉

〈指定用語：日南郡、林邑、扶南、オケオ、インド、ローマ〉

〔京都大学〕

大問1 「15～16世紀初めまでのマラッカ王国」(300字)〈後述〉思考力

大問3 「民主政アテネと共和政ローマの中心的機関とその構成員」(300字)《頻出》

〔大阪大学〕

- 大問1 「**大西洋三角貿易とハイチ独立**」《頻出》**思考力**
 〈資料：17世紀前半、17世紀後半、19世紀初頭のアメリカ大陸と西インド諸島におけるフランス植民地関連の資料。図版・引用文・データ表を含む〉
- 問2 「**16～17世紀ヨーロッパのカトリック教会**」(100字程度)
- 問4 「**17世紀以降のアメリカ大陸や西インド諸島の黒人奴隷**」(150字程度)
 〈後述〉
- 問5 「**フランス革命とハイチ独立の背景**」(100字程度)〈後述〉
- 大問2 「**帝国主義時代の東南アジアにおける民族意識の形成**」《やや難》**思考力**
 〈資料：表1. 1910年代のゴム輸出量データ
 表2. 1880～1930年のオランダ領東インドの主要製品の輸出額比率
 グラフ1. メッカ巡礼者数、
 資料1. 「20世紀初頭にオランダ領東インドで発行された雑誌」からの引用文〉
- 問2 「**19世紀末～20世紀初頭の東南アジア輸出品の変化**」(120字程度)
 〈要求内容：宗主国との関係や技術革新、人口移動を踏まえての説明〉
- 問3 「**東南アジアのムスリム社会におけるメッカ巡礼者の増加**」(120字程度)
 〈要求内容：表1・2の経済的変化と世界的な交通環境を踏まえた説明〉
- 問4 「**東南アジアのムスリム社会における民族意識の形成**」(150字程度)〈後述〉
 〈要求内容：グラフ1と・資料1を踏まえた雑誌流通量増加の背景説明〉

〔九州大学〕

- 大問1 「**国際連盟と国際連合の設立の経緯**」(600字)《頻出》
 〈要求内容：アメリカの動向に留意しての論述整理〉
 〈指定用語：ソヴィエト＝ロシア、安全保障理事会、大西洋憲章、スイス、連合
 国共同宣言、ヴェルサイユ条約、上院、ダンバートン＝オークス、
 十四カ条、サンフランシスコ会議〉
- 大問2 「**3つの資料によるイスラーム世界の発展**」《頻出》
 〈資料1・2. 歴史学研究会編『世界史史料②』からの短い2つの引用文
 資料3. 千葉敏之編『1187年 巨大信仰圏の出現』からの短い引用文〉
- 問2 「**8～9世紀のイスラーム世界におけるトルコ人の活動**」(100字)
 〈指定用語：サーマーン朝、ガズナ朝、アッバース朝〉
- 問6 「**第一回・第二回・第三回十字軍の結果**」(160字)〈後述〉
 〈指定用語：サラディン、イェルサレム王国、1147年〉

なお、北海道大学・新潟大学・愛知教育大(2022年は340字論述もあり)・福井大学・和歌山大学などは、50～150字程度の論述の常連校である。50～150字程度の事項解説や小

論述はポイントを簡潔に記述する力が求められるので、先生方はふだんの学習でも、5W1Hを意識して歴史を理解・把握し、流れや因果関係に留意し、要点を簡潔に整理して表現できるように、生徒を指導したい。

3. 東日本地域の主な国公立大学の論述問題と解答例

〔筑波大学〕

この大学の出題は一貫して出題構成は、400字論述4題、形式は指定用語5つ付き、地域はヨーロッパ・アメリカ関係史2題、アジア(含むアフリカ)関係史2題、時代は古代、中世～近世、近代、現代から各1題が基本となっている。《標準》が基本で、ときたま《やや難》が出題されるレベル。こうした出題構成であるため「東大的なグローバルな視点からの作問」は無く、字数は同じでも資料を利用したうえ「思考力を問う」一橋大の出題とは別種と考える。字数と指定用語の点で少し異なる点はあるが、京都大の論述に類似していると考えられる。

2022年は、大問1が「ヘレニズム時代におけるエジプトとその周辺の歴史」、大問2が「17世紀～第二次世界大戦勃発前までオランダの東南アジア進出」、大問3が「1910年代～30年代の中国共産党」、大問4が「1920年代のアメリカ社会」である。ここでは時代の幅が少し長い、大問2の解答例を述べる。参考は p.232、292、352。

【解答例】 大問1「17世紀～第二次大戦勃発前までオランダの東南アジア進出」**思考力**

《思考力…要求されている他のヨーロッパ諸国や現地勢力との関係の把握力》

オランダは、17世紀初めに東インド会社を設立してアジアに進出し、ジャワ島のバタヴィアを根拠地に、先に進出していたポルトガル商人を排除しつつ香辛料貿易の実権を握った。またアンボイナ事件を機にイギリスをインドネシア地域から締め出し、ジャワ島で領土獲得を開始した。各地の現地勢力は抵抗をこころみだが、18世紀半ばにマタラム王国が滅ぼされ、ジャワ島の大半がオランダに支配された。19世紀になると、オランダ政庁の直接支配に対してジャワ戦争が発生し、鎮圧後、悪化した本国財政を立て直すため、オランダは商品栽培の強制栽培制度を導入した。またマレー半島に進出したイギリスと協定を結び、マラッカ海峡を境界として支配圏を分割した。オランダの支配に対して、1910年代イスラーム同盟が組織され、崩壊後、20年代スカルノによってインドネシア国民党が結成された。なおオランダは、第二次世界大戦前に対日包囲網の一角を担った。(398字)

〈コメント〉

言及すべきヨーロッパ勢力としては、香辛料貿易をめぐるポルトガル、アンボイナ事件およびマレー半島とマラッカ海峡を境界とする勢力圏の分割との関係でイギリスを取り上げる。現地勢力との関係では、マタラム王国の滅亡とジャワ島支配の確立、ジャワ戦争による本国財政の立て直し策としての強制栽培制度の導入を指摘する。なお、現在の『詳説世界史』ではアチェ戦争とオランダ領東インドの完成は姿を消しているため、これに対する言及をしていない。インドネシア国民党との関係では、先行する民族運動としてのイスラーム同盟と指導者スカルノを取り上げればよいであろう。

〔東京大学〕

東京大学の出題内容は「教科書の範囲から逸脱しない」が原則である。作問者が各社の教科書の内容を丁寧に読んだうえで作成していることがよくわかる。大論述は、東京大学が入学後の学生に行う教育方針＝「与えられた多くの情報・知識を分析・整理して、グローバルな視点から思考する力を育てる」を反映した出題となっている。これは、大学入試センターが「改革」で掲げている「思考力を問う」出題と同じ考え方で、出題形式は大きく異なるが、これまでずっと大論述で「思考力を問う」作問を行ってきた大学である。

2022年は、大問1「8世紀～19世紀のトルキスタン」(指定用語8つ)は、リード文と設問文とに基づく形式の出題である。リード文の内容を読み取り、(1)トルキスタンを支配した勢力の交替、(2)この地に起こった勢力が周辺地域に及ぼした影響が、求められている。設問主旨と指定用語についての参考は、p.156～157、160、166、188、192～193、197、297。

大問2では、テーマ「支配・統治と法・制度」のもと、問1でa「ハンムラビ法典の内容と特徴(60字)」(p.18)、c「パフレヴィー2世の政策(60字)」(p.393)、問2でa「大憲章(120字)」(p.145)、b「『君主論』の内容(60字)」(p.206)、問3のb「変法運動の主張と経緯(120字)」(p.322)が、小論述として出された。

【解答例】 大問1「8世紀～19世紀のトルキスタン」《やや難》**思考力**

《思考力…出題意図の正しい把握力、与えられた情報・知識(指定用語)の整理力、そのうえでの論述構成力と文章表現力》

イラン系ソグド人の交易を保護してきた唐が、8世紀半ばのタラス河畔の戦いでアッバース朝に敗れ、勢力を後退させた。9世紀にウイグルが崩壊すると、トルコ諸民族が中央アジアへ移動してこの地のトルコ化が進んだ。トルコ人のイスラーム化はサーマーン朝のもとで進み、トルコ系カラハン朝の時代に一層進展した。11世紀にはトルコ系セルジューク朝が、西トルキスタンを支配してイランにも進出した。12世紀に宋と金により遼が減った際、西走した耶律大石が西遼を建ててホラズム朝とも争った。13世紀にモンゴル帝国が成立し、チャガタイ＝ハン国がトルキスタンを支配した。14世紀後半、チャガタイ＝ハン国の分裂後サマルカンドにティムール朝が成立し、アンカラの戦いでオスマン帝国を破った。この王朝のもと、イラン＝イスラーム文化の影響を受けてトルコ＝イスラーム文化が発展した。16世紀初め遊牧ウズベク人がティムール朝を滅ぼし、その後西トルキスタンに3ハン国を建てた。またティムールの子孫バーブルは、インドにムガル朝を建てた。17世紀にジュンガルが東トルキスタンを支配したが、18世紀半ば乾隆帝によって滅ぼされ、清の藩部となり、新疆の一部となった。19世紀後半にはロシアが南下策を展開し、ウズベク人のブハラ・ヒヴァ両ハン国を保護国とし、コーカンド＝ハン国を併合したうえ、新疆のイスラーム教徒の反乱を機にイリ事件を起こし、清と対峙した。(596字)

〈コメント〉

毎年述べているが、東京大学の大論述は取り組みやすい印象を与える。しかし、設問の意図を正しく把握して、全体図を描けることが大事である。事例を追って書いていくと、大海を漂うような状態になる。ここではリード文の内容を読み取り、(1)トルキスタンを支配した勢力としては、時系列に沿ってサーマーン朝、カラハン朝、セルジューク朝、西遼、ホラズム朝、チャガタイ＝ハン国、ティムール朝、ウズベク系3ハン国、清、ロシアを想起する。(2)この地に起こった勢力が周辺地域に及ぼした影響では、ティムールによるアンカラの戦いでオスマン帝国を破ったこと、バーブルがインドにムガル朝を建てたことを記述すればよい。なお、指定用語に宋があるため、耶律大石と西遼との関連からホラズム朝を使用したか、教科書的にはモンゴル帝国によって滅亡したことのほうが一般的だろう。

〔一橋大学〕

この大学は、毎年大問1が「中世～近世のヨーロッパ関係」、大問2が「近現代のヨーロッパ・アメリカ関係」、大問3が「近現代の中国中心のアジア関係」からの出題が基本的な各400字論述である。出題は、問題文が史料・出典の引用文で構成され、指定用語の無い形式が基本である。引用文には解答につながる内容やヒントが述べられているので、丁寧に読み取って、解答に活用することが大切である。2018年の《悪問》批判のあと、2019年・2020年は改善されたが、2021年は大問2が《悪問》に戻った。

2022年は、大問1「皇帝フリードリヒ1世のイタリア政策と文化的・政治的状況」が、《悪問》ではないが、《難問》である。大問2「ニューディール政策と新自由主義的改革」も引用文の読み取りが基本であるが、設問文の正しい把握で問われている2つの現象を想定できる。大問3「16世紀～20世紀の朝鮮関係史」は、各設問は具体的に記述しやすい出題であるが、400字の字数内で3つの設問を記述する論述方式となっている。設問ごとの字数配分が受験生に任されているぶん、最初に記述内容と字数の大枠を考えることが重要になる。

【解答例】 大問1「皇帝フリードリヒ1世のイタリア政策と文化的・政治的状況」

《難問》**思考力**

《思考力…設問主旨の正しい把握力、史料の読み取り力と文章構成力》

十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになった12世紀、ギリシアの古典がギリシア語やアラビア語からラテン語に翻訳されるようになり、それに刺激されて学問や文芸も大いに発展した。知識や教師を求めて各地を遍歴する学生は、商業の発達とともに都市に誕生した大学に集まり、ローマ法の伝統が残るイタリアのボローニャ大学では法学の研究が進んだ。この時期、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世は、国内統治の基盤を固めるとともに、ローマ教皇の権威に対抗するため、ローマ法に基づく皇帝理念を掲げ、古代ローマ復興をめざして積極的なイタリア政策を展開した。そのなかで、大学の教師や学生のもつローマ法の学識によって、臣民を神に由来する皇帝権に従わせるため、学生らの保護を命じた。そして北イタリアに多く生まれていた自治都市に政治的な影響力をふるうため、学生たちへの裁判権も、

博士や皇帝が認めた都市の司教に限定する勅法を発したのである。(397字)

<コメント>

資料の勅法を1158年に発した皇帝フリードリヒ1世(バルバロッサ)は、第三回十字軍に参加したドイツ国王である。なお、教科書ではここまで触れないが、ドイツ王=皇帝を教皇の封建家臣とする教皇庁の試みに対し、このフリードリヒ1世(バルバロッサ)以後、「神聖帝国」を称し、自らの帝権の「神直属」を強調することになった。これが「神聖ローマ帝国」と呼称する転機となったのである(参考:池谷文夫『神聖ローマ帝国—ドイツ王が支配した帝国—』第2章、刀水書房、2019年)。

この問題は受験生にとって、(1)資料の丁寧な読み取りから記述できる部分と、(2)2つの指定用語のように『詳説世界史』の内容で記述できる部分がある。しかし、「この勅法がなぜこの時期に発布されたのか」の背景に関しては、(3)教科書では山川『新世界史』(p.148 参照)の内容把握(学習)が必要となる。論述中の波線部分が(3)に該当する。この問題は、内容の(1)(2)については、受験生が記述できる可能性が高いため《悪問》とは言えないが、2つの用語を結ぶ背景は、『新世界史』で学習していない受験生にとって《難問》である。なお、皇帝フリードリヒ1世の在位期間は1155~90年であり、「イタリア政策」に言及する場合、一般的には教皇党と皇帝党の対立や都市同盟としてのロンバルディア同盟を記述したい。『新世界史』の「ミラノを盟主とするロンバルディア同盟に宗主権を認めさせ」の部分は、主語が皇帝フリードリヒ1世であるため、問題はない。詳細になるがロンバルディア同盟の結成は1167年である。出題のリード文に勅法の発布が1158年と表記されている。したがって、この論述では「ロンバルディア同盟」の使用を避けた次第である。

〔東京外国語大学〕

この大学は、**大阪大学とならんで世界史教育の高大連携に力を注いでおり**、意欲的な出題を行ってきた。2014年から、①史料・出典からの引用やグラフ・図表などで構成される問題文、②問題文の読み取りに加えてすべての設問と解答を参考にしての解答といった形式、③「グローバルな視点から歴史像を再構成させる大論述」といった**独特の出題形式である**。ただし、「問題文を読み取ったうえでの論述」は、「丁寧な読み取り時間」と「論述の再構成」と言った点が必要とされるため、大論述の字数は、2019年から500字に減り、2022年は400字に変化した。今後、400字程度の大問を維持するのか、大阪大学〈後出〉のように複数の小論述からなる設問に変わるのか、注意していきたい。

2022年の大問1は、前述のようにA~Fの資料を読んだうえで、6つの指定用語を使って「**第一次世界大戦後の国際秩序がもった可能性と限界**」(400字)を述べるものである。設問主旨と指定用語について、参考はp.338~341、347~348、350、362。

【解答例】 大問1-問9「**第一次世界大戦後の国際秩序がもった可能性と限界**」

《やや難》**思考力**

《思考力…資料の読み取り、出題主旨を踏まえた知識の活用と論述の構成》

1919年に連合代表が集まり、前年にウィルソンが発表した十四カ条を基本原則としてパリ講和会議が開かれ、米・英・仏の首脳を中心に運営された。会議で、中国の二十一カ条の要求取り消しが列国に退けられる一方、日本は赤道以北のドイツ領南洋諸島の委任統治権を得た。さらにヴェルサイユ条約が結ばれ、世界の恒久平和をめざす国際機構として国際連盟が成立した。しかしドイツなどの敗戦国とソヴィエト-ロシアが排除され、条約批准を拒否したアメリカが不参加のうえ、侵略国への制裁手段が経済制裁だけといった課題を抱えていた。世界の恒久平和をめざす流れは、1928年には戦争の違法化を提唱する不戦条約につながった。しかしヨーロッパ中心の国際秩序は、民族自決をアジアに適用せず、植民地の戦争協力で派兵まで行ったインドに対して、イギリスは約束していた自治からほど遠い統治法を1919年に出すと同時に、ローラット法を制定して独立運動を弾圧した。(398字)

〈コメント〉

史料[A]～史料[F]の中と問1～問8の設問文中に、指定用語の多くが出ている。ただし、求められていることは、「第一次世界大戦後の国際秩序には、どのような可能性と限界があったか」である。そのため「史料[A]～史料[F]の年代に気を取られすぎず、指定用語の可能性と限界のどちらで用いるのか整理しておく。戦後国際秩序とアメリカとの関係、成立した国際連盟が出発時点で抱えた課題、ヨーロッパ中心の国際秩序とそこでのアジアの扱われ方といった点を押さえて、「可能性と限界」を指摘する論述とする。東京外国語大学の論述は大字数の本格論述であるが、他の設問文の文章・解答が活用できる方式なので、「大学入学共通テスト」対策の演習としても活用をすすめる。

〔信州大学（教育）〕

この大学は、**入試改革が選択科目の指定に及んでいる**。資料の活用と複数の論述問題中心の出題であるが、2021年に地歴3科目の中からの2科目選択解答となり、それにともない世界史は大問1題だけの構成となり、論述の総字数もそれまでの850～900字から、21年は575字、設問ごとの最大字数も200字に減少した。

2022年はさらに変更が加えられ、社会科全体での**地歴3教科の中から1科目、政経・公民3教科の中から1科目選択**による2科目選択となった。世界史は大問1題だけで、(1)が短答記述5問、(2)が「**近世ヨーロッパの政治状況と国際関係**」(指定用語5つの350字)、(3)が「**朝貢体制と近世ヨーロッパの国際関係の比較**」(150字)の出題となっている。これまでは地図や図版の読み取りに基づく出題もあったが、「思考力を問う」方向性から「情報・知識の正しい理解力、歴史の大きな把握力、因果関係に注意した歴史像の構成」を問うものに変ってきている。ここでは、3つの資料の内容と関連させての論述を求めた大問1-(2)の解答例を述べる。参考はp.214～215、220～221、226～227、237。

【解答例】 大問1-(2)「近世ヨーロッパの政治状況と国際関係」思考力

《思考力…資料の読み取りと学習した知識との活用力》

カトリック教会や神聖ローマ帝国の持っていた普遍的権威が動揺した近世のヨーロッパで

は、諸国が自国の利害を求めて戦争を繰り返していた。三十年戦争の惨状をみたグロティウスは、戦時においても諸国民の間で守るべき共通の法が存在すると唱えた。ヨーロッパ最初の国際戦争となったこの戦争が、多くの国が参加した国際会議で結ばれたウェストファリア条約で終結したため、国際法に基づく主権国家体制が確立したと称される。また主権国家の形成期に国王を主権者とする絶対王政と呼ばれる統治体制が生まれ、ルイ 14 世に代表されるこの体制を支える政治思想として王権神授説が唱えられた。一方イギリスでは、名誉革命で国民の一部が参加する議会主権に基づく立憲王政が確立し、人民の革命権を唱えるロックがこれを擁護した。(346 字)

<コメント>

3つの資料は、(ア)は万民法を提唱したグロティウスの『戦争と平和の法』、(イ)は人民主権の立場から人民の革命権を提唱したロックの『統治二論』、(ウ)が王権神授説を唱えたボッシュエの『聖書の言葉にもとづく政治論』である。普遍的権威の動揺と主権国家の成立→初期の主権国家に見られる絶対王政と主権国家体制の成立→絶対王政に替わる立憲王政の出現を大きな流れで、資料との関連に触れて整理すればよい。

4. 西日本地域の主な国公立大学の論述問題と解答例

〔名古屋大学〕

この大学では、大問1～3において150字程度までの小論述が数問出されたのち、**大問4で350～400字程度の本格論述**が出題される。論述問題は、2019年が簡単なリード文と図版に基づく指定用語無しの350字、2020年は史料引用の問題文とこれを参照にしての350字「アカプルコ貿易と中国」であったが、2021年は簡単なリード文と5つの指定用語と言った、従来の形式による出題の「東欧社会主義圏の消滅と中国」350字に戻った。

2022年の大問4は、簡単なリード文と6つの指定用語付き(ただし「すべてを使わなくてもよい」方式)の350字論述「**5世紀までの東南アジアにおける東西交流と海上交易**」である。また、少し長い資料文を利用した大問2と短い5つの資料文を利用した大問3で、80字程度の事項解説的小論述が3問出題されている。ここ2年の動向をみると、入試改革に即した傾向に向かうのか、従来型に落ち着くのか、様子を見る必要がある。標準レベルだが、地域と時代の観点から大問4の解答例を述べる。参考はp.44、61、63、74。

【解答例】 大問4 「5世紀までの東南アジアにおける東西交流と海上交易」《頻出》

紀元前後に季節風を利用した交易がローマ・インド・中国などのあいだで活発化すると、インド洋と南シナ海を結ぶ東南アジア地域に、交易の中継地となる港市国家が誕生した。1世紀末にはメコン川下流に扶南が建国され、その外港オケオの遺跡からはローマ金貨やインドの神像、さらに後漢の銅鏡が出土している。またベトナム中部の日南郡にローマ皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌスの使者が訪れたという記録が残っているが、この地域には2世紀末にチャンパーが建国された。交易が活発に行われるなか、ベトナム北部には漢字や儒教などの中国文化が伝わった。また4世紀末から、東南アジアのその他の地域ではヒ

ンドゥー教や大乘仏教、インド神話、サンスクリット語、インド式建築様式などが受け入れられ、「インド化」と呼ばれる変化が生じた。(346字)

〈コメント〉

求められている観点は、「東西交流・交易の場」としての、紀元前後から5世紀ごろにかけての東南アジア地域の理解である。論述中の下線の用語が指定用語だが、『詳説世界史』で学習した受験生ならば、極めて標準的レベルの出題と理解できる。中国文化の影響としてのドンソン文化の銅鼓は、前4世紀頃からなので、ここでは記述しないこと。文化交流の点では、4世紀末からの「インド化」現象を指摘すること。なお、指定用語中の「林邑」は中国書物に見られるチャンパーの中国表記であるため、現在『詳説世界史』ではすべて「チャンパー」で表記している。リード文中の「すべてを使う必要はない」は、このことを意識した表現とも考えられるため、この論述ではチャンパーと表記した。

〔京都大学〕

この大学の世界史は、毎年大問1でアジア史関係、大問3でヨーロッパ・アメリカ史関係の300字論述が出題される。設問の対象時代は年ごとにそれぞれの地域で入れ替わるが、アジア史関係は中国史関連が圧倒的に多い。テーマはオーソドックスなものが多く、指定用語はほとんど付かない。アジア史関係とヨーロッパ・アメリカ史関係が別個に出題されるため、東京大学的なグローバルな場を設定したテーマはほぼ考えられない。

2022年は、大問1が「15～16世紀初めまでのマラッカ王国」〈指定用語なし〉、大問3が「民主政アテネと共和政ローマの中心的機関とその構成員」〈指定用語なし〉(参考は p.33～34、41～42)となっている。2022年は、大問3が頻出テーマである点から判断して、大問1の解答例を述べる。参考は p.113～114。

【解答例】 大問1「15～16世紀初めまでのマラッカ王国」**思考力**

《思考力…限られた地域と時代に対するグローバルな視点から把握・構築力》

15世紀初めに始まった鄭和の南海遠征を機に明のうしろ盾を得たマラッカ王国は、タイのアユタヤ朝への従属から脱して、明と朝貢関係を結んだ。一方、王がイスラームに改宗したことからイスラーム商人との関係が強まり、マラッカはジャワ島のマジヤパヒト王国に替わってインド洋交易圏と南シナ海交易圏を結ぶ交易の中心地となり、王国を有力化するとともにイスラーム拡大の契機となった。イスラームはその交易ルートに沿ってジャワやフィリピンに広まり、同世紀末にはスマトラでアチェ王国が成立した。しかし、王国は香辛料を求めてこの地域に進出したポルトガルによって16世紀初めに占領され、イスラーム商人も拠点をアチェに移した。(296字)

〈コメント〉

「15世紀から16世紀初めまでのマラッカ王国の歴史」と言う、極めて限定された期間の論述である。求められている条件でグローバルな視点の理解力を求めている。(1)外部勢力との政治的・経済的関係としては、アユタヤ朝・明・マジヤパヒト王国・ポルトガルとの関係を

述べる。(2)周辺地域のイスラーム化に与えた影響としては、15世紀後半のジャワ・フィリピン方面とスマトラのアチェ王国を指摘すればよい。なお、ジャワのバンテン王国とマタラム王国を記述したいところだが、前者の成立は1526年頃、後者の成立は1580年代末とされる。そのためこれら2王国の成立は、冒頭に述べた「16世紀初めまで」の条件から外れるため記述しないこと。

〔大阪大学〕

この大学の歴史学科は、**全国の大学のなかで高等学校の世界史教育に最も熱心に取り組んでいる**。入試問題でも、2014年からできる限り固有の歴史用語や年号を使わないで叙述する試みが開始された。大問のテーマはグローバルな視点からの歴史把握を特色とするが、設問は複数の小論述と本格論述で説明を求める方式。**2020年に**出題形式が大きく変化し、**論述設問**といった点を除けば、**2021年1月から実施される「大学入学共通テスト」の方向性を先取りするかたち**となった。

2022年は、20年からの形式を継承しつつ、**大問1「大西洋三角貿易とハイチ独立」**は、問題が図版を含む3つの資料から構成され、設問が用語・説明文の4択2問、短答記述1問、100～150字程度の小論述3問。**大問2「帝国主義時代の東南アジアにおける民族意識の形成」**は、問題が表データ2つ、グラフ1つ、資料文1つから構成され、設問が用語の4択1問、120～150字程度の小論述3問である。資料読み取りと論述構想の時間を考えれば、こうした複数の小論述からになるのが当然。論述の総字数は、昨年の870字から740字に減少した。この概括で取り上げた他大学の論述テーマ、対象の時代・地域から判断して、ここでは解答例として、大問1の問4(150字程度)・問6(100字程度)を取り上げる。参考は、問4がp.204、235、問6がp.250、273。

【解答例】 大問1－問4「アメリカ大陸や西インド諸島の黒人奴隷」

西インド諸島やラテンアメリカのスペイン植民地では、16世紀から鉱山や農園での酷使と疫病により先住民人口が激減し、新たな労働力としてアフリカから黒人奴隷が輸入された。17世紀に西インド諸島や南北アメリカ大陸でサトウキビ・タバコなどのプランテーションが発展すると、多くの黒人奴隷が大西洋三角貿易によって運ばれた。(151字)

【解答例】 大問1－問6「ハイチ独立と当時のフランス」

統領ナポレオンは、教皇との和解やイギリスとの講和による対外関係の安定化と、フランス銀行の設立による財政の安定、革命の成果を定着させる法典の公布などの内政整備により、国民投票による皇帝即位をめざしていたため。(103字)

〈コメント〉

問4は、①16世紀の鉱山や農園での酷使による先住民の激減、②不足した労働力としてのアフリカからの黒人奴隷の輸入、③17世紀以降の大農場(プランテーション)の発展と三角貿易によりさらなる多くの黒人奴隷の輸入の順で記述する。問6は、ハイチ独立が1804年であり、この年にナポレオンが国民投票で皇帝に即位したことを念頭において、「最終的に

軍事介入を断念した」経緯を記述すればよい。外政(対外関係)面は、1801年の宗教協約(コンコルダート)、1802年のアミアンの和約による安定化を指摘する。内政面では、1800年のフランス銀行設立、1804年のナポレオン法典の公布による国内状況の整備と国民投票を指摘すればよい。なお、大阪大学では「2014年からできる限り固有の歴史用語や年号を使わないで叙述」する方向性が打ち出されているため、ここでもあえて「宗教協約(コンコルダート)」や「アミアンの和約」といった用語を使用しない解答例にしている。

〔九州大学〕

この大学の出題は、**大問1～大問3までの全体を通して、東京大学の出題と類似の構成・形式**。初め圧倒的な近現代史偏重の出題から出発したが、その後は全問を通して古代～現代までを網羅する出題に移ってきた。大論述の字数は隔年で600字と500字であったが、2019年からは600字が続いている。

2022年の大問1「国際連盟と国際連合の設立の経緯」は、10の指定用語付き600字論述。**大問2「3つの資料によるイスラーム世界の発展」**は、3つの短い史料を利用した出題だが、設問は短答式記述2問(3答)、60字と40字の事項解説、それぞれ3つの指定用語付きの100字・160字の小論述となっている。なお小論文は、史料の読み取りではなく、設問文を読んで指定用語を用いて作成できるもの。大問1の論述は、指定用語はすべて教科書に記述されており、頻出テーマであり、内容的にも標準レベルの設問である(参考は p.338～340、368、371～372)。大問2－問2「**9～10世紀のトルコ人の活動**」は、後出の早稲田大学(法)の論述の後半部と重なるため、それを参照してほしい。よってここでは、問6「**第一回・第二回・第三回十字軍の結果**」(160字)の解答例を述べる。参考は p.108、137～138。(※解答用紙に「英数字は2字で1マスを用いること」と記されている)

【解答例】 大問2－問6「第一回・第二回・第三回十字軍の結果」

第一回十字軍は1099年に聖地イェルサレムの回復に成功し、イェルサレム王国と諸侯国などを建設した。勢いを盛り返したイスラーム勢力に対して、1147年に第二回十字軍が行われたが失敗に終わった。その後アイユブ朝のサラディンが聖地を奪回したため、1189年英・仏・独の君主によって第三回十字軍が開始されたが、聖地回復は果たせなかった。(159字)

〈ポイント〉

求められているのは、「第一回・第二回・第三回の十字軍の結果」。文中に下線を付した3つが指定用語となる。「1147年」は一般的にはありえない指定用語になるが、教科書の第二回十字軍の年代ルビで付されているので確認してほしい。第一回十字軍とイェルサレム王国の建設、第三回十字軍とサラディンの関係とそれらの結果は、基本レベルの内容となっている。この大学では第1問の長大論述でかなりの時間が割かれる点を考えて、資料を利用した問題文であれ、小論述は「思考力を問う」設問ではない。そのため詳細な部分まで記述しようとする必要はないと考える。

5. 東京地域の主要私立大学の概括

2022年の私立大学は、マーク形式を活用した語群からの用語選択、選択文・用語からの4択、説明文の正誤判定による組合せ解答形式と、短答記述式が主流である点に変化はない。冒頭の概括の第2点で指摘したように、「改革」の一例かもしれないが、問題文に長い資料文を用いる大学が増えた。ただし、設問は「思考力を問う」ものとは言えないのが現状である。なお、論述の出題校(学部)は昨年とほぼ同じである。

《早稲田大学》

商学部と社会科学部の出題で《やや難》レベルが少し見られたが、実施学部全体では標準レベルの出題がほとんどとなっている。学部の掛け持ち受験者が多い大学なので、**受験者は全範囲を確実に学習・整理することが大切な対策**となる。なお、今年も複数の学部で「出題ミス」が見られた。**大学当局は本当にしっかりした作問・チェック体制を確立してほしい。**

〔法学部〕 2022年の大問はすべて標準レベルの出題。**問5の論述問題は、当学部としては珍しく「6～10世紀末のトルコ系民族の興亡と移動」(300字)**〈指定用語：唐の建国、安史の乱、キルギス、パミール高原、イスラーム王朝〉であった。以下に解答例を述べる。参考は p.90～91、155～156。

【解答例】

モンゴル高原から中央アジアにかけて大遊牧国家をつくった突厥が、隋の離間策などで6世紀末東西に分裂した。東突厥は唐の建国を助けたが、唐の太宗に服属し、西突厥は高宗に滅ぼされた。再興した東突厥もウイグルに滅ぼされた。ウイグルは、安史の乱鎮圧に協力したのち唐を圧迫したが、9世紀中頃トルコ系のキルギスに滅ぼされて四散した。一部は南下してタリム盆地に定住したが、パミール高原の西方に移住した一派によって中央アジアのトルコ化が進んだ。10世紀中頃には中央アジア初のトルコ系イスラーム王朝としてカラハン朝が成立し、イラン系のサーマーン朝を滅ぼして、中央アジアのトルコ人のイスラーム化を促進した。(298字)

〔商学部〕 この学部は毎年、**4題の大問のなかでアメリカ史関係と経済関係を、また大問4では100字論述**を出題する。2022年は、大問4が「アメリカ合衆国における通商の歴史」であり、設問13では最近のアメリカ・中国の貿易対立に関連して会社名「ファーウェイ」が解答に求められた。昨年も述べたように、「すべての地域の現在までを対象とした学習の整理」を指導してほしい。**100字小論述は「1982年にメキシコで起こった経済的に重要な出来事とその背景について、アメリカとの関係を踏まえて説明せよ」**である。小論述だが、第2次石油危機後のアメリカでのインフレと「メキシコの債務危機」に関連させた、「思考力」を問う設問となっている。参考は p.396、403。

〔文学部〕 学部の出題方針は「広い範囲を標準レベルで問う」であり、全範囲を確実に学習・整理しておけば大丈夫である。2022年も「**絵画図版を用いた美術関係史**」が2つ出題されており、教科書・図説資料集などで対策を怠らないでほしい。

〔文化構想学部〕 今年も短いが本格的な問題文と設問となり、**出題レベルは全般的に上昇している**。大問8の「女性アーティストと近代西洋美術」は、絵画図版と「女性の権利・人権問題」を結び付けており、「改革」傾向での出題なのか、来年を注意したい。

《慶応義塾大学》

この大学の2022年の世界史入試は、基本的に各学部とも前年を継続する出題傾向だが、法学部だけは全問が《やや難》～《難問》レベルの出題を続けている。

〔経済学部〕 この学部の出題は、**ほぼ1500年頃以降の近現代史が原則で、史資料文の引用・地図・グラフ・絵画図版を用いた出題・設問が主流**。2022年の小論述(1行を約35～40字程度と換算)は、3行が3問、2行が5問、1行が2問で、**総字数は昨年同様にほぼ約800～850字程度**となっている。対象時代の制約と小論述が多い点を別にして、**すべての大学の入試問題の中で、2021年1月から始まった「入学共通テスト」対策に最も参考となる内容・形式**である。小論述については、設問の主旨を正確に把握して史資料文やグラフ・図表を読み取り、ポイントを簡潔に表現できるよう、生徒にアドバイスしてほしい。小論述の解答例として、大問1「17～20世紀東南アジア・東アジア」の**問4の(1)**「18世紀のイギリスがフランスより有利に戦争を遂行できた、それを可能にした方法とについて、その政治的背景に触れつつ、説明しなさい」(3行論述)を述べる。参考はp.226～227。

【解答例】

名誉革命により議会主権が確立したイギリスでは、17世紀末に中央銀行としてイングランド銀行が創設され、その後議会の保障する国債の引き受け先となり、国債制度も整備された。こうした財政革命により、内外からの資金調達による軍事費の捻出が実現した。(117字)

〈コメント〉

フランスに先立ち、イギリスで中央銀行の設立と国債制度が整備されたことで、戦費が国王個人の借金から政府が保障する借金となった変化を踏まえて、簡潔に記述する。

〔商学部〕 2022年は大問3題とも標準的レベルの出題。**学部の性格と関連する経済関係の系のテーマ**に基づく大問は無かった。なお、大問2「社会における差別の歴史」では、解答でアルファベットでのBlack Lives Matterが問われた。

〔文学部〕 2022年も、長大な問題文の大問4題構成で、**解答はすべて記述式**。難易度的には昨年に続いて4題すべて標準レベル。しかし、『世界史用語集』の解説文をしっかりと読むことが**学習対策として有効**である。

〔法学部〕 **全問選択形式**の出題に変わりなく、用語選択と正誤判定文の4択からなる設問。2022年の出題は、大問1「大航海時代」が《やや難》、大問2「サファヴィー朝～カージヤール朝」が《難問》、大問3「第二次大戦後の難民問題」が《難問》、大問4「17～19世紀のヨーロッパの自然観」が《やや難》と判断できる。この学部は『世界史用語集』の解

説文をしっかりと読むことが有効な学習対策となるが、今年も大学当局に対して作問レベルの「改善を強く望む」次第である。

《上智大学》

2022年の世界史入試も、全学部共通〔TEAP利用型〕だけである。出題はリード文「近代アメリカとアフリカにおける人種差別」だけで、設問1が説明文による4択5問、設問2が「19～20世紀にかけて、アメリカ合衆国の黒人が経験してきた人種差別的法制度の存続・制度・廃止の変遷」(200字)〈指定用語：奴隷制、南部諸州、南北戦争、キング牧師〉、設問3がモザンビークの独立運動指導者の著作からの長い引用文を読んで、「植民地支配の理屈と実態」と「モザンビークの《同化民》をめぐる状況」を、「黒人に対する差別意識との関わりに言及して」300字程度の論文を作成するものである。設問3は2つの引用文を読んで論旨を把握したうえでの論述として「思考力」が問われるもの。問題文と史料文のすべてを示すことができないため、設問2の解答例を述べる。参照はp.248、276、382、388。

【解答例】 設問2「19～20世紀にかけて、アメリカ合衆国の黒人が経験してきた人種差別的法制度の存続・制度・廃止の変遷」《頻出》

奴隷制の存続を認めた合衆国が憲法のもとで、1860年代に南北戦争が起こるとリンカン
は奴隷解放宣言を發布した。戦後の憲法修正によって奴隷制廃止や黒人の市民権が認め
られたが、90年代以降、南部諸州では州法により投票権の制限などがなされた。1950年
代に最高裁で公立学校での人種隔離を違憲とするブラウン判決が出され、キング牧師ら
による公民権運動が高揚し、60年代に公民権法が制定され、人種差別的法制度は撤廃さ
れた。(198字)

〈コメント〉

「南部諸州」の箇所では、世界史用語集を学習している生徒は州法を補強するため、「ジ
ム＝クロウ法」を記述することが考えられる。『詳説世界史』では1950年代のところで
「ブラウン判決」が記述されているため、この解答例では『詳説世界史』で記述されてい
ない「ジム＝クロウ法」を避け、「ブラウン判決」を用いる論述とした。

【その他の主要私立大学(論述出題校を中心に)】

《津田塾大学》

2021年も論述は200字。論述テーマは、英文科が大問1－問2で「第二回・第三回十字
軍が起こされた経緯と結果」を〈指定用語：イェルサレム王国、サラディン、フリードリ
ヒ1世〉で求めている(参考はp.137～138)。国際関係学科は大問1－問3で「日露戦争
について、開戦の背景に触れながら、その開始から終結まで」を〈指定用語：日英同盟、
血の日曜日事件、ポーツマス条約〉で求めている(参考はp.313、323)。ともに頻出テーマ
のうえ、内容も標準レベルである。

《学習院大学》

文学部歴史学科で毎年 200 字論述が 2 つ出題される。2022 年は、A が「魏晋南北朝～宋の官吏登用制度」〈指定用語：門閥、没落、殿試〉を求め(参考は p.83、93、161)、B が「17 世紀末～18 世紀の植民地覇権争い」〈指定用語：東インド会社、イギリス＝オランダ戦争、七年戦争〉を求めている(参考は p.218、225、229、233、235)。ともに頻出テーマのうえ、内容も標準レベルである。

《青山学院大学》

2022 年も文学部(史学)の大問 4 で 350 字論述が出題された(受験生は A・B から 1 題選択して解答)。論述テーマは、A が「西晋～南北朝に至る政治と社会の動き」〈指定用語：五胡十六国、永嘉の乱、司馬睿、東晋、建康、陶淵明、江南、王羲之、貴族、清談、竹林の七賢〉(参考は p.82～85)、B が「1815 年～1914 年間のヨーロッパの国際体制」〈指定用語：ウィーン体制、クリミア戦争、三帝同盟、三国協商、三国同盟、正統主義、1848 年革命、勢力均衡〉(参考は p.256～271、331～332)である。2 題とも頻出テーマであり、指定用語の多い大論述だが、ここでは冊子全体を考慮して A の解答例を述べる。

【解答例】 設問 4 - A 「西晋～南北朝に至る政治と社会の動き」

魏から禅譲を受けて西晋を建国した司馬炎は、江南の呉を滅ぼして中国統一を達成した。その後、帝位をめぐる王族間で八王の乱がおこって混乱し、これに乗じて自立した匈奴による永嘉の乱で西晋が滅びた。このとき江南に逃れた一族の司馬睿が、上級官職を独占していた貴族の支持をえて、建康を都に東晋を建てた。華北は五胡と呼ばれた遊牧民が興亡を繰り返す五胡十六国時代となった。5 世紀前半、華北は鮮卑の建てた北魏によって統一されて北朝が始まり、江南では武将の劉裕によって東晋が滅ぼされ、宋が建国されて南朝が始まり、南北朝の対立時代となった。また晋では貴族文化が花開き、老荘思想に基づく清談が流行して竹林の七賢と呼ばれる知識人が生まれた。文学で田園生活へのあこがれをうたう陶淵明や、書分野で王羲之が優れた作品を残した。(347 字)

〈コメント〉

指定用語が 11 語と多いため、一語ずつの説明にとらわれ過ぎると字数をオーバーしてしまう。「政治の動き」では、西晋→江南での東晋と華北での五胡十六国→江南での南朝開始と北魏による華北統一といった、政治的分裂を指摘する。「社会の動き」としては貴族による上級官職の独占と、西晋そして東晋を通じての、特に江南における貴族文化を述べる。『詳説世界史』では現行改訂版のとき「永嘉の乱」と「竹林の七賢」が記載から消えているが、この 2 語については『世界史用語集』を利用した学習で十分補えるだろう。

《中央大学》

経済学部では 100～120 字程度の小論述が出されてきたが、**2022 年**は大問 1 で「平和に関する布告の内容」(40 字)、大問 3 で「宋の文治主義」(50 字)〈指定用語：11 語の中か

ら3語選択する形式〉と、ともに**事項解説**に変化した。なお、大問1は問題文が資料「**十四力条**」を全文引用した**長大なもの**であるが、設問は「思考力を問う」ものではない。今後こうした動きがどのように進む(変化する)のか注意したい。なお、各学部の出題はほぼ標準レベルである。

《法政大学》

論述の出題は無い。解答形式はすべての学部で、**短答記述式**が1/3程度、用語・説明文からの4択が2/3程度の割合。**選択肢の説明文の内容は『世界史用語集』(山川出版社)からの利用が多く**、少し細かな内容が問われる傾向が続いている。そのため受験生にはこの点を踏まえた学習対策を行うよう伝えたい。なお、各学部とも出題はほぼ標準レベルである。

《明治大学》

各学部の解答形式は、**短答記述式**と用語・説明文からの4択がほぼ半分ずつ。**商学部**では毎年**120字程度の小論述**があり、2022年は標準レベルの「**対抗宗教改革**」であったが、設問の主旨を把握して、簡潔にポイントを指摘するだけでよい。**法学部**では、大問1が長大な資料を引用した問題文になっているが、設問は「思考力を問う」ものではない。なお、**4択の説明文は長めのものであるため、焦らずに読んで正誤判定を行ってほしい**。2022年は、各学部とも出題はほぼ標準レベル。

《立教大学》

この大学は、2022年も世界史は2回(2日)だけの実施となった。解答形式は、全体では**短答記述式**が2/3程度、用語・説明文の4択が1/3程度の割合。**出題は2022年も大テーマによる形式**。そのため問題文のテーマに関連したさまざまな分野と時代縦断的な設問が行われるため、どうしても**混合問題的内容**になっている。内容は標準レベルがほとんどなので、学習対策は「世界史の全範囲をきちんと整理していれば十分である」と、受験生に伝えて欲しい。

6. 関西地域の主要私立大学

論述の出題はないが、ここでは以下の4大学について概括する。

《同志社大学》

この大学は、出題形式が大問3題構成になってから、大きなテーマ型出題がみられたが、**2022年の出題は大きなテーマと教科書の章ごとのテーマに近いもの**となっている。すべての日程での入試は、解答方式が**短答記述式と用語・説明文からの4択がほぼ半分ずつ**で、各日程とも出題はほとんどが標準レベル。従来ほどではないが、受験生には当大学の受験対策としては『詳説世界史』を丁寧に読むことが最良であると、伝えて欲しい。

《立命館大学》

この大学は、すべての日程の入試で**解答形式が全問短答記述式**という独自の出題形式を継続しており、2022年も同じである。出題テーマは、おおまかに**前近代と近現代の中国関連史2題、前近代と近現代のヨーロッパ・アメリカ史関連史2題**からなっており、中国史関係ではときおり「難問」用語が問われることがある。なお2022年は、2月3日の試験の大問1で「前近代の東南アジア海域史」が出題されたが、他のテーマは上記の傾向に沿ったものである。なお、各学部とも出題は標準レベルとなっている。

《関西大学》

この大学は、すべての日程の入試の**解答形式がすべて記号による、語群からの選択と用語・説明文の4択**の組み合わせである。出題テーマは、すべての日程の出題が**前近代と近現代のアジア史関係2題と、前近代と近現代のヨーロッパ・アメリカ関係史2題**で構成されているが、立命館大学と異なり、アジア史関係は全地域が出題対象とされる。2022年は2月2日入試の大問2の、テーマ「**明治期日本の内政と外交**」に沿った出題が目をつけた。2022年4月から開始される『歴史総合』に先行した試行的作問なのか、来年度以降を注意したい。なお、各日程とも出題は標準レベルである。

《関西学院大学》

この大学は、2022年に**すべての学部**の設問・解答形式が、**語群選択2問と説明文の4択6問**に統一された。大問構成の5題は、欧米史関係3題、アジア史関係2題が一般的で、それぞれが**教科書の章や節ごとに近いテーマ設定**である。4択の正誤判定の説明文には、『世界史用語集』（山川出版社）の解説文を利用した**ものが多い**。そのため、設問によっては少し細かい内容の説明文が出される点を意識しておくといよい。なお、各学部とも出題は標準レベルとなっている。ただし上記のような傾向が強いため、受験者に対して『世界史用語集』の**説明文を丁寧に読むことが最良の対策**である、と伝えたい。

上述したように、私立大学では大学ごとに利用度に差があるものの、『世界史用語集』（山川出版社）の解説文の記述内容が数多く利用されている。繰り返しとなるが、**私大専願型の生徒に対しては、教科書に加えて『世界史用語集』を丁寧に併読することが最善の学習対策**となることを伝えたい。